書評 02

福岡 伸一・伊藤 亜紗・藤原 辰史 著

『ポストコロナの生命哲学』

集英社 /2021 年 9 月刊 /240 ページ /840 円＋税
ISBN　978-4-0872-1185-6

評者：縄手 望未
奈良女子大学大学院人間文化総合科学研究科

世界各地で新型コロナウイルスの流行が始まってから、約 2 年半が過ぎた。日本ではいまだ、外出時にマスクを着用する人が大半を占め、日々感染者数が報じられている。私たちは、ウイルスや人間を科学という情報で捉え、ウイルスを「恐ろしい敵」とみなして排除し、テクノロジーを駆使して人同士の接触を減らすべく、様々な制限のもとで日々のくらしを営んでいる。本書は、福岡伸一（生物学者）、伊藤亜砂（美学者）、藤原辰史（歴史学者）の 3 人の研究者が、「生命を情報と見過ぎたこと、ロゴス化しすぎたことが、いったい何をもたらしたのか」という命題を共有しつつ、ポストコロナ時代の人間のあり方を論じるものである。ロゴスとはギリシャ語で、「論理」または「言葉」を意味する。福岡によると、脳を肥大化させた人間は、本来全てが一回性の偶然である自然（ピュシス）の中に因果律を生み出し、論理に変えた。そうして自然の気まぐれさや残酷さを相対化し、対抗することができるようになり、種の保存よりも個の生命を尊重することに価値を見出したという。つまり、人間はロゴスの力によって、個々の生命体はそれほど重要視されず種の保存が唯一無二の目的という自然界の「遺伝子の掟」から、自由を獲得した。そして文明や社会、経済、制度をつくり出し、種を発展させてきた。しかし、人間も自然の一部である以上、私たちは完全にロゴス化された社会で生きていくことはできず、自然とロゴスのどちらにも帰依することなく絶えず相互のバランスをとりながら生きていく必要がある。本書では、新型コロナ問題を考えることを通じ、私たちがロゴスによって手に入れた自由である個々の生命の価値（基本的人権）を守りつつ、いかに自然や環境と共存していくかを検討している。

第一部「論考・コロナが投げかけた問い」は、著者らがそれぞれに担当した第一～三章で構成される。第一章「コロナは自然からのリベンジ」（福岡伸一）では、生物学者であり、動きながらバランスを取り続ける生き物の流動性「動的平衡」を科学史と哲学を統合させつつ捉えてきた著者が、新型コロナ問題を俯瞰的かつ長い射程の視野から考察している。人間とは何か、ウイルスとは何か、人間とウイルスとの関係等の論点について、生物学的かつ論理的根拠を示しながら、「ウイルスは私たちの一部」（p.34）等、新しい視点からの考察を提示している。第二章「思い通りにいかないことに耳を澄ます」（伊藤亜砂）では、美学者の著者が、コロナ禍で明るみとなった社会の「当たり前」に対する違和感と、それをふまえポストコロナ時代を生きていくために必要となる具体的理念を論じる。美学とは、私たちの感性や身体感覚など、曖昧で捉え難く、言葉というロゴスで簡単に表現することはできない、しかし確かに私たちの感覚として存在し、時に世界の見え方を一変させるほど強い衝撃ともなり得るものを、あえて言葉を用いて深めていく学問だという。美学研究活動な

どを通し、障がい者との交流及び身体感覚に着目することで見出された時間の捉え方や、「聞く」こと、「信頼」の重要性についての考察は示唆に富む。第三章「コロナがあぶり出した社会のひずみ」（藤原辰史）では、農業の現代史を専門に研究を行う歴史学者の著者が、ナチス・ドイツや数々の感染症を巡る歴史をふまえ、現在を生きる指針を提示する。藤原は、コロナ禍は生きることや生活することが困難な状況に陥っている人の存在をあぶり出し、私たちにこれまでの社会のひずみや矛盾を現実の問題として受け止め、向き合うきっかけを与えてくれたという。さらに、「負の歴史」を直視し、歴史から危機を乗り越える方法を学ぶ必要があると説く。

第二部「鼎談・ポストコロナの生命哲学」は、著者らの鼎談内容を収録した第四～七章で構成される。第四章「漫画版『ナウシカ』の問いかけ」では、3人共通の愛読書である漫画版『風の谷のナウシカ』を軸に、ポストコロナの人間のあり方について検討する。漫画版『風の谷のナウシカ』は、ウイルスのような生命を脅かすものとの向き合い方について大きな示唆をもたらす作品だという。パンデミックは人間の経済活動が招いた結果であるという新しい指摘をはじめ、コロナ禍にみられる過剰なまでの消毒文化に対する危惧が述べられる。そして、「きれいすぎる人間観を見直す」（p.119）ことや自分の中に存在する不調和も受け止め、偶然性や「ノイズ」を排除せず、また決して交われないものと棲み分けつつ共生する方法を考える必要性が指摘される。第五章「共生はいかに可能か？」では、自然環境との共生について議論が展開する。まず、根絶・撲滅することのできないウイルスという自然の動きを封じるため、「テクノロジー＝ロゴス」の力を強めようとすることの危うさが指摘される。また、「ウイルスは利他的な存在である」という発言から、利他に関する考察や、共生にあたっての利他の重要性が論じられる。第六章「身体観を捉えなおす」では、根本的な変化を伴う真に「新しい」私たちのあり方について考える。「新しい」生命のあり方を考える際、人間の内面、精神や身体性を無視せず、見つめ直し、受け入れ、信頼するという身体観を持つことが重要であると提起する。第七章「ポストコロナの生命哲学」では、コロナ禍を経験した私たちにとっての長い射程を持った生命に対する見方、つまり「新しい生命哲学」とは何かという問いについて、各章の論点を重ね合わせながら著者らの主張が展開する。自分の鼓動・呼吸など体の発する様々な声を聴くことや、他者も他の生命体も自然物として生きているということに思いを馳せ、他者が発する自然の歌を聴くことの重要性が指摘される。そうして感じ合うことのできた声を受け入れ、信頼し、それに合わせた考え方が求められるという。

本書の新型コロナ問題をふまえた生命哲学に関する多角的なメッセージは、読者の視線をより深くへ導いてくれるだろう。自然や人間をロゴス化しすぎ、様々な「きまり」が生まれている状況下で、それにとらわれ生きづらさを感じている人は多い。ウイルスの存在や他人との交流を恐れ、毎日呼吸ひとつにも気を遣うことがあった。しかし本書で著者らは常に「怖がらなくてもいい、他者と接することを忘れず、自然を感じ、その声に耳を澄ませてみよう」と語りかけてくれている。読み進めるうちに、ウイルスや人間、生命に対する見方を変えてくれる一冊である。

人間を人間たらしめているのは、ロゴスの力によって「遺伝子の掟」に背き、個体の生命の尊厳や自由、あるいは基本的人権を出発させたことであろう。したがって、生命のあり方や進化の様相を社会規範や制度に直接当てはめることは、多くの誤解を伴うために大変危険だと考えられる。また、基本的人権を揺るがす自然の力によりもたらされたコロナ禍の今こそ、人間があえて約束した個々の生命に価値があるということを守り抜く努力が必要となるだろう。